

## 「特集」気候危機下の豪雨災害

### 「被災地から」

## 佐賀県武雄市 相次ぐ内水氾 濫、ポンプ排水は限界

党佐賀・武雄市議 江原一雄

### 二年前と同じ地域で被害発 生、被災者の悲痛な声

八月十一日から降り続いた大雨によって、佐賀県西部の武雄市では、一級河川六角川（延長四十七キロメートル）の周辺で内水氾濫（支流から本川に流れ込むことができず合流点付近が冠水）が生じ、床上浸水千八百八十四戸、床下浸水五百七十二戸、合計千七百五十六戸の浸水被害が生じました。国土地理院は武雄市内では十四日正午時点で約四平方キロメートルの範囲が浸水し、深さは最大で三メートル程度に及んだとの推計を公表しました。

特に被害が大きかったのは、ハザードマップでも浸水の危険が指

摘されていた北方町（河口から約二十五キロメートル地点付近）、朝日町（同二十六キロメートル）、橘町（同二十八キロメートル）で、北方町と朝日町は二年前の九州北部豪雨でも同様に千五百三十六戸の浸水被害（床上千二十五戸、床下五百十一戸）が生じていました。二年前に続き被災した住民からは、「根本的対策をとってもらわないと心が続かない」など、悲痛な声があげられています。

八月十四日には、冠水地域が広がるなかで、「住民を救助するためのボートが足りない」と北方町の区長から私に電話があり、武藤明美党員議を通じて県対策本部に連絡し救助が実施されるなどの緊急対応も求められました。今年の豪雨では幸いに人的被害は出ませんでした。二年前には、武雄川で車に乗ったまま流されて死亡（五十代）、浸水した自宅一階で足の不自由な高齢者が溺死するなどの事態も生じました。

農業関係の被害は約十五億八千

万円（二年前は約二十億円）、商工業は約八十五億円（同九十五億円）などで、コロナ禍で困難を強いられていた地域経済にとっても輪をかけてきた打ち撃となつていきます。

災害廃棄物置場となつた北方運動公園には、二年前の水害後に購入されたと思われる一九年製の新しい洗濯機、冷蔵庫、テレビなどの高価な家電製品や畳が水に浸かつて使えなくなり、大量に捨てられていました。短期間に二度も被災されたみなさんの苦しみを考えると、本当に心が痛みます。

日本共産党は、災害発生を受けて翌十五日に、ただちに田村貴昭衆院議員（党八月豪雨災害対策本部事務局長）を先頭にお見舞いと現地調査に訪れ、被災者のみなさんから要望をお聞きし、その実現に力を尽くしてきました。

また九月の武雄市議会では、質問に立った十一人の議員全員が八月の水害問題を取り上げました。

## 災害の要因

### 記録的豪雨

内水氾濫の最大の原因は記録的な豪雨です。八月十一日から十九日までの武雄市の総雨量は一二五六ミリに達しました（市の議会答弁）。これは武雄市の平年の年間降水量の半分を超える雨が、約一週間に集中して降り注いだことを意味します。また「佐賀新聞」は、一八九〇年代に一六一六ミリだった平均年間降水量が、二〇一〇年代には二二四〇ミリと、一・三倍になったと報じています。

今回、特に八月十四日から雨脚が強くなり、一時間の最大雨量は七〇ミリとなるなど、十四日六時から二十四時間雨量は二五〇ミリとなり、この記録的豪雨が内水氾濫を生じさせたのです。

### 平地を流れる六角川の特徴

他方で、六角川の特徴も内水氾

濫に関係しています。六角川は有明海特有の大きな潮汐作用等による自然干陸化と古くからの干拓によって形成された低平な白石平野を蛇行しながら流下し、その勾配は中流部で約一／一五〇〜一／一〇〇〇、下流部で約一／一五〇〇〇〜一／四五〇〇〇程度の緩勾配です。有明海の干満差による潮位変動の影響は河口から二十九キロロビの中流部にまで及び、長い感潮区間には有明海より遡上する浮遊粘土（ガタ土）が多く堆積しています。このために武雄市を含む六角川の流域面積の約六割が内水域（内水氾濫による浸水危険区域）となっており、古くから内水による浸水被害が頻発しています。

一九八〇年と一九九〇年の洪水を機に集中的な河川整備が実施され、堤防整備、河道掘削、橋梁改築、遊水地の建設、水門・樋門の新設・改築などがおこなわれてきました。しかし、軟弱地盤のために整備済みの堤防が沈下したり、河道内でのガタ土の堆積とヨシ原

の繁茂により洪水の流下断面不足などが生じるなど、多くの課題を抱えています。

### 排水ポンプ停止

そうしたもて、内水氾濫被害を軽減するために、六角川水系には合わせて六十箇所排水ポンプ場が整備されています。一方で、内水被害が軽減された地域では、市街化が進行し、これはポンプ場の排水能力を上回る内水が生じた場合、より大きな被害が起こる事態を招きかねない事態も生じています。

またポンプ排水の強化は、六角川本川の流量を増やすこととなります。しかし、河道整備水準を上回る出水時に継続的にポンプ排水をおこなうと、河川の水位が上昇し、越水や堤防決壊の危険性を生むこととなります。このため排水ポンプの運転調整（一時停止）を余儀なくされる（本川に排水できない）という事態になるのです。

一九九一年、二〇〇二年の内水氾濫は、

まさにそうした事態となりました。今年の豪雨災害では、内水氾濫の生じた八月十四日に、三回にわたりポンプ停止および再開がおこなわれました。一回目のポンプ停止要請は午前三時十五分で、午前二時三十分「六角川の新橋より上流部の排水ポンプが、このまま雨が降り続ければ今後停止する可能性があります。浸水のおそれがある地区の方は身を守る行動をお願いします」との防災行政無線放送がおこなわれ、その後六角川の水位が計画高水位を超えたため、新橋より上流の七箇所のポンプ場が停止されました。再開は七時間十五分後の十時三十分でした。

二回目の停止要請は十二時三十分で再開は四十五分後の午後一時十五分、三回目の停止要請は午後二時三十分で再開が五十分後の午後三時二十分でした。三回のポンプ停止時間は合計八時間五十分でした。

これらよって行き場を失った支

流の水が住宅地に流れ込んだ（内水氾濫）のですが、その水位は二年前の水害よりも五十センチ以上高くなったとの声も各地で聞かれました（二年前はポンプをのべ三時間十分停止）。

二年前、豪雨災害を受けて国土交通省は六角川水系の治水対策事業「河川激甚災害対策特別緊急事業（激特）」を採択し、武雄河川事務所は、①河道掘削、②分水路新設（白石町での蛇行部分のショートカット）、③排水能力増強（武雄市の高橋川との合流部分のポンプ増強）の二〇二四年度完了をめざしていました。河道掘削は今回の水害発生時にはすでに計画の八六％の進捗に達していましたが、被害を防ぐことはできませんでした。いま、この「激特」事業だけでは内水氾濫を防ぐことができないことがあきらかになり、抜本的な治水対策を求める声が高まっています。

## 有明海への直接ポンプ排水 など、防災対策を提案

気候変動のもとで、記録的な豪雨が頻発するようになるなかで、六角川一本に頼る対応では内水氾濫はくい止めることができない“というのが、多くの関係者、市民の共通認識となりつつあります。私は、九月会で六角川に流れ込む洪水量を軽減するために、ため池やクリークの事前放流および有明海へ直接ポンプ排水をおこなうことを提案しました。

この地域（白石平野および干拓地）には、農業用水を確保するために数多くのため池やクリークがつくられており、有明海沿岸部まで水路でつながっています。延長幅は六百四十九キロメートル、保水量は五百八十二万トンにおよびます。適切な事前放流がおこなえれば有効な治水対策になりますし、福岡県などすでに実施し成果をあげているところもあります。私のこの提案について担当部長は「早急に検討

したい」と答弁しました。

有明海への直接排水は、白石町の有明海沿岸部に設置された排水ポンプをさらに増強し、現在はその少ない部分を六角川に排水していた六角川南側地域の雨水を有明海川へ排水するというものです。これができれば六角川への流入をかなり減らすことができ、武雄市でのポンプ停止を大きく回避できると考えられています。

排水機場などその多くは白石町に位置しますが、この提案は田島健一・白石町長の持論であり、専門家の賛同も得られているものです。県は二年前から「流域治水」の考え方に立ち六角川治水のためのプロジェクトチームを発足させていますが、さらに流域の三市三町（武雄市、多久市、嬉野市、白石町、大町町、江北町）が力を合わせられるようにその役割を發揮することが期待されています。

私の質問に対し小松政・武雄市長は「提案をふまえ、県も同じ考えだと思おうので県にリーダーシッ

プをとってもらって早急にとりくみたい」と答弁しています。

これらの提案の実現を含め、被災者支援、安心して住み続けられるまちづくりへ引き続き力を尽くしていきたいと思えます。

（えはら・かずお）